

Muse

帝国データバンク史料館だより [ミュージズ]

TDB Historical Museum

2011.7
VOL. 15

日本魂
復興記念
書画帖
二

巻頭特集

関東大震災 の記憶

産業遺産探訪①

愛知・知多半島 常滑

学芸目ファイル FILE No.004

著名人たちがこめた想い

日本魂復興記念書画帖

関東大震災の記憶



地震発生

―被害全容―

関東大震災が起こった1920年代は、恐慌の時代であった。第一次大戦後の好景気も東の間、1920(大正9)年、東京株式取引所の株価暴落をきっかけに、戦後反動恐慌に突入する。取引銀行に対する信用不安から取付騒ぎが起こるなど、混乱の時代への幕開けとなった。帝国興信所にも不況の波は押し寄せていた。創業者後藤武夫の当時の訓示からは「中略」興信事業が経済の基礎を会員の加盟料に置いておる以上、如何に財界が不況であれ、減収を不可抗力のものとして黙過する事は能はぬのであります」(「脱俗」128号「能率増進の外に途なし」、1923年4月25日)などと営業不振について不況を理由にしないよう、社員に奮起を促す姿が伺える。このような状況下の日本を襲ったのが、関東大震災である。

2011年3月11日に発生した東日本大震災。津波被害に遭った街の姿は、第二次世界大戦時の焼け野原や関東大震災時の焼け跡を思い起こさせた。その関東大震災は、東京・横浜に壊滅的な打撃を与え、多くの企業が被災、日本経済に大きな混乱が生じた。創業23年目の帝国興信所も、その例外ではなかった。しかしそこには、今と変わらず、復興に向けて必死に生きた人々や企業の姿があった。

《帝国興信所の被害》

1923(大正12)年9月1日午前11時58分、相模湾西北部を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生、関東地方を中心に甚大な被害をもたらした。武夫の自伝「後藤武夫伝」(1928年、日本魂社)によると、武夫は午前11時半頃から本社(東京都中央区新富)の執務室で、仙台支所長石田與助と面談をしていた。揺れを感じ始めても武夫は話を続けたが、社内は「轟然雑然騒然」とし、社員達は逃げ始め、武夫も数人の社員に外へ引っぱり出された。その時3階の事務室が崩壊し、19名のタイピストと人事部長矢野元三郎が1階まで落ちたが奇跡的に無事であった。

1階の印刷工場では約50名が機械や机の下に隠れて落下物から身を守ったが、逃げ遅れた4名は死亡した。余震が続く、落下物から身を守りながらの救出活動は思うようには捗らず、結果的に6名が死亡、26名が負傷した。夕方から各地に火の手が上がリ、未明に本社ビルと倒壊を免れた武夫の自宅が焼失。横浜支所も全焼した。武夫は家族と泉岳寺に避難した。帰宅してから被災した社員もいた。理事として経営に携わっていた平松壮一は地震発生後、武夫の指示で本社ビルを施工した清水組(現清水建設)へ駆けつけ、修繕の依頼をした。その後明石町の自宅に戻り、家族の無事を確認して再び会社に向かい、負傷者の搬送などを終えて午後5時頃に家族の待つ避難所に帰ったが、その後火災に見舞われている。その時の様子を平松は次のように語っている。

恐怖に襲はれながら遠近を見渡すと折りから西の方に当たって丸ノ内が燃えて居る。北を見ると日本橋石町あたりから北へ北へと煙が揚がって居る。東に廻っては本所深川が夕空の中に大紅蓮となって居るのが見える。而して是等の火災は皆相当距離があったので、まさか我が京橋区が―築地が焼けよ

うとは思わなかった。(中略) それは私どもの想像ばかりでなく、誰しもが皆そう思ったらしく、夜に入って日本橋あたりの人々が安全地帯だと言って続々押し寄せて来た。(中略) そうこうするうちに夜の八時頃となったが、火は何処をそう回ったものか風下に当たると南小田原町が燃え出して来た。けれどもそれは風下であり且つ川を隔てて居るから大丈夫だと思った。又西方にも火の手が熾んになって余勢は銀座から築地方面にまで延びて来た。更に一方は日本橋の火が本八丁堀方面まで及んで、私たちは三方から火に攻め立てられたわけである。三面皆火。

『努力』8巻10号「遭難談」死地を脱れて、1923年12月 日本魂社

また、月島に住んでいた会計部の木下武雄は、猛火が迫るなか、子供を連れて海中に飛び込んだところ、朽ちて捨てられた舟を発見し、水を掻き出して乗り、沖合で大型船に救助された。

《東京興信所の被害》

当時、信用調査業界を牽引していた東京興信所も被害に遭った。日本橋の本社では、地下室金庫の重要書類は持ち出すことができたが、本館の一部が倒壊、その後の火災で本館別館ともに焼失し、横浜支所も焼失した。しかし、設立者渋沢栄一と親しかった

第百銀行頭取の池田兼三や、第一銀行頭取の佐々木勇之助らの尽力で、丸内の東京銀行集会所の一室を借用することができ、震災から1ヵ月後の10月中旬より営業を再開した。12月には横浜出張所に仮事務所を設置し、震災から6年後の29(昭和4)年、本社跡地に鉄筋コンクリート造地下1階地上3階建ての新社屋を竣工した。

《復興への始動》

地震発生後、新聞各紙は被害の様子を報道しているが、新聞社も活字が倒れてバラバラになり、活字の紛失が生じたため、漢字が抜けて平仮名になったり、大きさの異なる活字が使われることもあった。また機械が使えない状況下でガリ版で号外を出すなどした。また紙面には移転広告や、従業員へ向けての事務連絡、震災見舞いや安否確認なども多く見られる。

国内外からの義援金や支援物資についても報道されており、壊滅的な被害のなかで、支援の手が差し伸べられていたことがわかる。

神戸から山城丸

東京に向け出発す

兵庫県庁及び神戸市では東京横浜へ先ず第一に食糧品を送る事に努力して居るも大量の白米は今直ぐには手に

入らず取敢ず鈴木商店の倉にあった朝鮮白米四百石、加州白米二千六百五十袋、小麦粉一万袋、味噌三百樽、食塩二百俵、梅干十九挺を午後四時神戸を出帆の山城丸に積込ませ輸送したが其の七割を東京市へ三割を横浜市へ贈る手筈である

〔大阪朝日新聞〕1923年9月3日

米艦隊の救援要請

糧食の運搬任務に(同)

日本へ木材

コロンビヤから

〔読売新聞〕1923年9月13日

必需品積込み

加奈陀の同情(同)

このような状況からいち早く復興しようという姿勢は、武夫も例外ではなかった。「事業の復興は商取引の開始であるが、そこに興信事業の必要なることは云うまでもない」(『後藤武夫伝』)と決意した武夫は、倒壊した本社に代わり泉岳寺の本堂を借りて仮事務所とした。本堂の瓦はめくれ、壁には亀裂が入り、雨漏りする状況の中、経机を借りて業務を開始するが、300人に上る全従業員を収容することはできず、「涙を吞んで二時解散ということにした。而して右三百名中特に至誠努力の人のみを選び抜いて事業

を継続することにしたのであった」(同)と、震災復興のために人員削減を行うことを決めた。そして本社焼跡に

自分回復の見込みなきに付
所員諸君は任意の行動に
出でられたし
所長

という看板を立て、解雇した従業員への対応として「而して失職者に対しては予て親交ある内務省及び東京市社会局当事者に依頼して就職の途を講ずべく時に依頼した次第であります」(『脱俗』133号、所長訓示「震後の大方針確立」、1923年9月25日)とした。しかし一方的な解雇に反対した従業員が騒動を起すという一幕もあった。9月19日付の「読売新聞」は、その模様を次のように伝えた。

帝国興信の無断解雇

所員百名騒ぐ

(中略) 所員は新聞広告により定期泉岳寺に参集したところ幹部の一人が諸君はやけあとの立札を見ないのかあの時限り解雇した事になって居るのだと追いかへそうとしたので一百有余の所員は憤然色をなし、其場に於て善後策を協議し、後藤所長に肉迫しようとしたが後藤氏は姿をかくして面会をさせた



震災後復刊第1号の『帝国興信所内報』(1923年10月17日)
 震災から約1ヵ月半後に復刊となった。復刊の挨拶の他には、企業の被害の様子が記事となっている。「大日本麦酒被害甚大」「石川島造船所災況」「震災後の松竹キネマ」「三大百貨店の損害と善後策」など(所蔵:東京大学総合図書館)

帝国興信所内報の復興に就いて

大震災後第一回の帝国興信所内報を發行するに際しては、社員各位の健在と逸早く復興とを祝賀すると同時に、幾多不幸なる被災者各位に對して同様の同情を表するものである。未曾有の天災に際し、甚き過りては、慈善活動の大昭と幾多の官民能く、形勢を承継し、急務は我々の心強く感ずる所である。惟よに帝都の復興ならんや、軍に輸送美の修復のみならず、主として我が銀行會社及商工業者の實質的復興を見るにあらざれば、決して之を望むを得ない。我等は實に此の地に立ち、復興事業の其使命を

経済復興のために 『帝国興信所内報』復刊

帝国興信所がまず取り組んだことは『帝国興信所内報』の復刊であった。震災後の混乱した状況下では情報が錯綜してデマが広まるなどし、正しい情報が必要とされていた。企業の被害状況や復興の様子を伝えることは興信事業の使命であり、経済界が復興するための第一歩であったのだ。

しかし、倒壊した本社とともに瓦礫となった印刷機械は使えず、また武夫は身一つで避難したために購入する費用もなかった。『帝国興信所内報』がわずか1ヵ月半で復刊できたのは、武夫の妻タマが、地震後避難する際に1万円の国債を自宅から持ち出していたためであった。これを知った武夫は

この国債を持って大阪へ向かい、印刷機械を購入した。印刷機械が到着したのは、焼失した武夫の自宅跡に30坪ほどのバラックの仮社屋を立て、泉岳寺から移転した直後であった。活字は従来購入先であった弘文堂の主人が活字製造機械を持ち出して無事であったので、すぐさま鑄造を依頼した。こうして10月17日に『帝国興信所内報』の復刊に至り、徐々に事業の復興が進んでいった。震災があった23年度の調査件数は不明であるが、20年度46,199件だったものが、24年度は15万9,716件、26年度には20万4,571件に上り、基幹事業である信用調査は堅調な推移を見せた。財務面をみると、23年度は本社社屋焼失などによる特別損失約29万円を計上し、約23万円の当期損失を計上、赤字に転落した。しかし翌年度は12万5千円の利益を計上、26年度には累積損失を解消するなど事業の復興を果たした。

本社ビル再建

震災5年前の1918(大正7)年、帝国興信所は現在の東京・新富町に本社ビルを完成させていた。レンガ造りの

地上3階建ての建物には、1階には応接室や印刷室、2階には武夫の執務室や会計兼庶務課室、外交員室、そして3階には会議室と文書課があった。武夫は「建物は、外観敢て美を誇るに足らず、規模も亦宏壮と称するにあらざるも、華を去り、実に就き、質実堅牢及び便利を旨としたる点に於ては、過去十有余年の間に積層したる帝国興信所の信用と、数年前の創立に係る日本魂社の精神とを遺憾なく表現せるもの(『脱俗』75号新築記念号「皇天の暗示」新築落成に際して)」、1918年11月20日と表現している。出入口の装飾には当時流行していた「ゼゼッション」というスタイルを採用するなど、近代的な意匠を施していた。し

かし竣工からわずか4年余で倒壊、焼失したのである。焼跡に残った建物の残骸は、当時陸軍の爆破実験により処理が行われた。

工兵隊も匙を投げた 東京會館の大建物

取壊しに手の付け様がないボツボツ爆破隊の引き揚げ(中略)少々の手間はかかっても喜んで爆破の申し込にに応じているのは、工兵にとって今後の爆破作業は又と得難い実際の演習で平素ならわざわざ高価な爆破建築物を建ててやるのだから一年二回も演習はなし得なんだのが一挙に全国の工兵大隊ををして実地経験をさせ得た次第、(中略)一番火薬が要り従って爆破の高価については官庁ものでは通信省で約一百万円近く民間の建築物では日本橋の帝国興信所で八百



再建後の本社ビル

一枚の写真から・特別編

1924年度

全国支所長会議

1924(大正13)年4月4日、震災から7ヵ月後に、武夫自宅跡に建てられたバラックの仮社屋前で撮影された、第4回全国支所長会議の写真である。本社2階外交室で開催され、出席は32支所、欠席は14支所であった。

武夫は訓示で「支所長会議開催の理由は普通の場合以外大興信所の支所長として当然為す可き大震災後の状況、復興の現状等を視察せられて支所経営乃至支所員激励の参考に資すると云うことも其理由の一つである、諸君としては人道上当然なさざる可らざる本所の罹災見舞いを此機会に実行せられたことともなる訳で、真に有意義の会合であると思うのである」と、震災後の特別な状況で開かれている会議であることを示している。と同時に、帝国興信所が復興への道を歩み始めた重要な歴史上の出来事でもある。

武夫は今後の方針について「①急速に且根本的に本支所の内容を充実せしむること。②急速に且根本的に不良支所の改造を断行すること」と説明し、全国の他の支所が、本社、横浜と同じように被害に遭ったと思つて努力すれば5年の目標も2、3年で達成することも難しいことではない、と鼓舞した。

所長の訓示が終わる頃、1階の印刷



室から聞こえる機械音があまりにもうるさいので、武夫宅に場所を替えて会議が行われた。会議を終えて記念撮影をしたのがこの写真である。その後帝国ホテルに会場を移して晩餐会の運びとなった。帝国ホテルは新館開業当日に震災被害に遭つたが、軽微な被害に留まり、被災者の避難所、あるいは被災企業の仮事務所として使われるなど、焼け野原の東京の中で残った復興への希望的存在であったのだ。帝国興信所も、全国事業所の中心であった本社社屋は失つたがこの仮社屋で再出発し、再び一丸となって復興に突き進んだ。そのことを示す写真である。

六十円、これらはすべて実費で官省も皆陸軍省へ納入した陸軍省では作業完了後技術部で一切の爆破に就ての経験資料をあつめて記録を作成するようだが、敵地作業と違い市街地作業の記録として世界の陸軍に貢献さるいい材料もあろうとのこと(中略)

〔東京朝日新聞〕1923年10月5日

震災後3年間でバラックの社屋が手狭となり、26年12月、貸地としていた本社跡地に鉄筋コンクリート造り地下1階地上4階建ての新社屋を竣工した。武夫は「(中略)所員各位が至誠努力に一貫し徹底的に斯主義を実行せられた賜ものであつて誠に欣懐の至りに勝へない次第である。就ては此の機会において帝興業務の上に一新時代を到し多々益々至誠努力主義を実行し全国本支所協力一致して世界的大興信所たる実績を挙げんことを切望して止まないものである」(『所報』「東京本所の移転」、1926年11月25日)と従業員に訓示した。

このビルは、太平洋戦争下の空襲にも耐え、70(昭和45)年まで44年間本社ビルとして歴史を刻んできた。その後、貸事務所や当社の分室として使われてきたが2002(平成14)年に取り壊しとなった。震災からの復興の証であるとともに、激動の時代を支え、生きてきたのである。

企業の記憶が
残すもの

渋沢栄一記念財団 実業史研究情報センターでは、東日本大震災後の4月下旬から、「社史に見る災害と復興」と題して、同センターのブログの新しいカテゴリを増やし、日々更新している。同センターで構築中の「社史索引データベースプロジェクト」の蓄積データのを使って、関東大震災に関する本文の概要のほか、掲載ページ、年表に記載されている地震・災害の関連事項が紹介されている。それを見ると関東大震災だけでなく、それ以降に起きた地震や天災、事故などさまざまな災害を乗り越え今日を迎えている企業が、多くあることがわかる。

100年以上生きる老舗は、恐慌、戦争、オイルショックを乗り越え今がある。一つの企業の歴史も日本の歴史、復興の歴史である。しかし単なる歴史上の出来事とするのではなく、「教材」「教訓」として活用し、過去から学び、未来に起こりうる災害に備えなくてはならない。

参考文献：『東奔西走百年の歩み』92年3月株式会社東亜興信所『日本経済新聞80年史』56年12月、『毎日新聞百年史』72年2月、『読売新聞百年史』76年11月、『朝日新聞社史』大正・昭和・戦前編『95年7月

愛知・知多半島 常滑

瀬戸・信楽・丹波・備前・越前とともに「六古窯」の一つに数えられる常滑焼。世界遺産に登録された平泉や日本初の武家政権誕生の地、鎌倉。そのどちらからも常滑の窯が大量に発掘されている。高温焼成による褐色の大きな焼き物はやがて建築資材というインダストリーの分野で窯業の近代化を牽引する存在になっていった。

地形・地質・技術が生んだ常滑の窯業

常滑の町には驚くことに、焼酎瓶や土管、電線管でんせんかんと呼ばれる埋設用の通信管が住宅の土台や塀、切通しの擁壁などに当たり前のように使われている。町の情感を形成しているのは、空に延びる赤煉瓦の煙突と、土管など曲線のフォルムものを積み重ねることで生まれる美しいパターンである。常滑市民俗資料館・陶芸研究所長である中野晴久さんとともに変化に富んだ丘陵地帯である常滑の町を歩いた。

常滑の焼き物の歴史は今から

900年ほど前まで遡る。平安時代末期から知多半島の丘陵部全域で甕かめ、碗、鉢などの生産が行われていたと言われている。室町時代には現在の常滑周辺に集約され、製品も壺や甕などの大型品が中心となってくる。

常滑の地に窯業が栄えた理由としては、良質な陶土が産出されたことに加え、丘陵地という地形が焼き物に向いていたことが挙げられる。当時は煙突の技術がなかったため、空気の流れをつくるために傾斜地に窯を設置する必要があったからである。しかし、常滑焼を一大産業にまで発展させたのは、海に接していたという地理的条件によるところが大きい。製品の出荷のみならず、窯の燃料の調達にも非常に有利であった。

さらに中野晴久さんの話によると、「知多半島は小規模な河川しかなく、

1950年代に愛知用水が引かれて水利・用水が敷設されるまで農業には不適地でした。そこで、窯業がひとつの選択肢として着目されたのです」

土管製造に成功、大規模窯業へ歩み始める

江戸時代になると工芸品もつくり、常滑の窯業は発展したが、生産体制はあくまで家内制手工業的なものであった。当時の生産者は仲間組織をつくり新規参入を規制することで既得権益を守っていたが、明治時代になると様相が一変する。政府の規制緩和により仲間組織による規制がなくなり、農民や運送業者などが続々と新規参入した。さらに常滑焼を大きく変えたのは近代土管の技術開発の成功である(写真①)。

近代日本の土管は、1872(明治5)年、横浜に新居留地を造成する際、英国の設計技師

リチャード・ブランドンが、下水道用土管の国産化を決めたことに始まる。

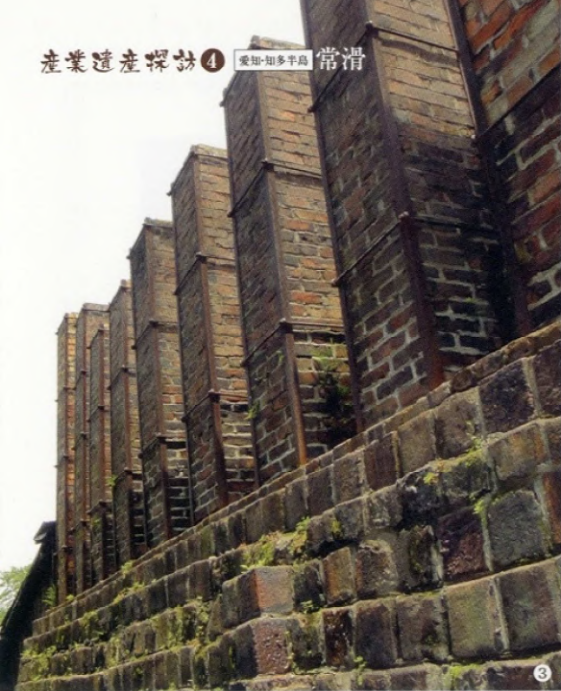
「ブランドンは最初、土管を瓦屋に製作させましたが強度に問題がありました。その頃神奈川県の参事である大江卓とつながりがあったのが知多郡の大地主でもある粉山頼三郎で、常滑なら硬く焼き締める甕をつくっているということで、話をしたのが常滑の窯業のリーダー的存在であった鯉江方寿です。しかし最初に焼いた土管は接続部に問題があり、ブランドンの検査に合格しませんでした。そこで木型に合わせる方法を考案し、問題を解決しました」

鯉江方寿の成功で規格品による大量生産が可能になったことに加え、日本の近代化が土管の需要を飛躍的に拡大させた。鉄道網の整備に伴い、線路による灌漑水路の分断を防ぐための強固な土管が必要とされたのである。また東京で疫病が流行ると都市下水道整備の必要性が叫ばれるなど、常滑焼の土管需要は増大する一方であった。

窯の仕様も進化した。明治期、常滑焼は登り窯という窯で焼かれ薪を燃料としていたが、後半期になると、燃焼効率に優れ価格が安定している石炭が登場する。1900(明治33)年、常滑陶器同業組合が結成さ



①



れると、倒焰式と呼ばれる石炭窯の開発に取り組み、これに成功したことで石炭窯が急速に普及した。

「この登り窯は陶業窯と言いつてもと陶栄社という焼き物商社の専属窯でした(写真②③)。1974(昭和49)年1月まで使われた常滑最後の登り窯です。INAXに残っているのが倒焰式の窯です(写真④)」

常滑の窯業発展と2人の人物

常滑三か村の一つである瀬木村の焼き物作りの家に生まれた方寿は硬くて均質な陶器を大量に焼く技術開発に成功し、近代土管の量産化を導く。また、同業者への技術の開放や、焼き物の輸出、名工の招聘、美術研究所の設立にも尽力した。

「方寿は常滑の窯業に非常に貢献したものの、多角経営に乗り出して失敗します。関東の資本を入れた陶弘社という会社も息子の高司と共に設立するのですが、それぞれが自己主張をした拳句に分裂し、これもうまくいかなかった。それを回避したのが伊奈長三郎で、彼は自分で人材を抱えることで工場を大きくしていきます」

伊奈長三郎は父、初之丞とともに、フランク・ロイド・ライトが設計した

帝国ホテルの外装タイル製作の技術顧問に招かれ、高品質タイルの大量生産に成功した。1924(大正13)年に「伊奈製陶株式会社(後のINAX)」を創業し建築陶器のトップメーカーに発展させた。

「鯉江家は美術研究所をつくるなど常滑の近代化に向けての人材を育成し、伊奈家は大学などから工業技術者をどんどん入社させ、新しい技術をグループで共有していきました」

明治から大正期の常滑窯業界は優秀な技術者の養成に力を注いであり、後の常滑窯業発展の原動力となったのである。

地場産業から町のアイデンティティーへ

「私が高校生だった頃は煙突もたくさんあり、校庭に真っ黒な煤が点々と落ちていましたが、今はものすごい勢いで煙突も消えていっています。ただ、こんな風景はどこにもないということで観光資源になり、映画のロケ地にもなりました」

明治期以降を支えた土管生産や、



『帝国銀行会社要録第15版』(帝国興信所、昭和2年)収録の伊奈製陶株式会社の企業概要



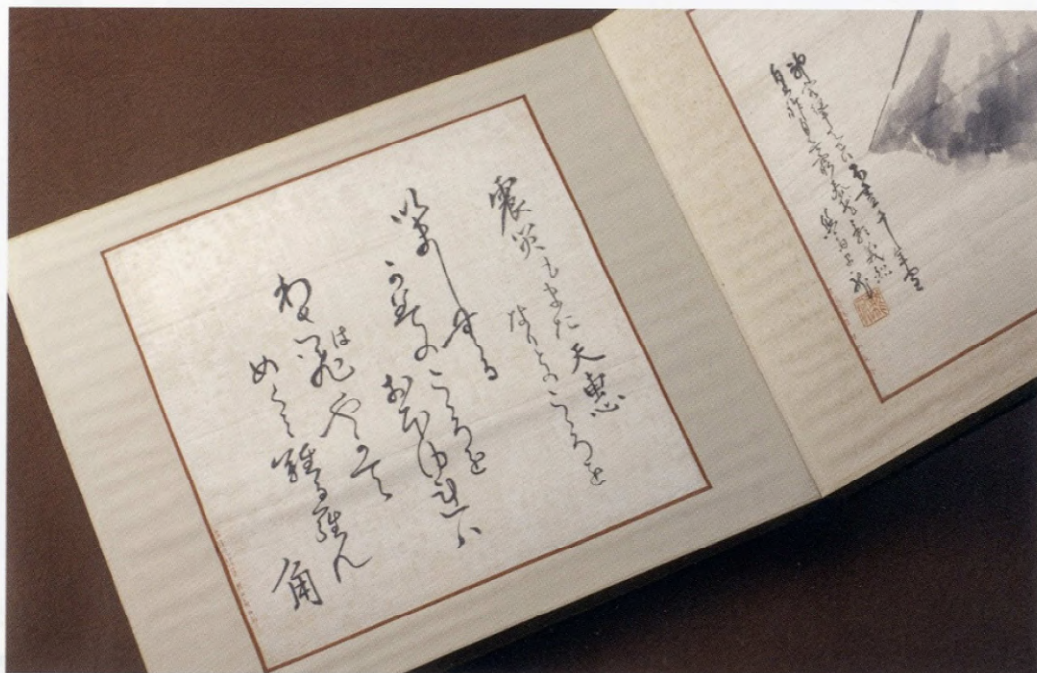
『帝国銀行会社要録初版』(帝国興信所、大正2年)収録の陶弘社および陶栄社の企業概要

大正期より産業化が進んだタイル・衛生陶器の技術は、多くの革新を繰り返しながら、今日の常滑の産業発展を担ってきた。かつての甕や壺は、高機能タイルや先端技術を織り込んだ衛生陶器に変貌しており、日本を代表する産業へと発展を遂げた。しかし一方で、産業がグローバル化するほど、かつての陶工たちが創り上げた伝統を見失いそうな不安がよぎる。常滑では「やきもの散歩道」「土管坂」(写真⑤)に代表される産業遺産を活用した観光開発に取り組んでいる。活性化される事はもちろん歓迎すべきことだが、焼き物によって町や国の産業発展に尽くしてきた数多くの陶工たちの情熱と精神を未来に残すことを忘れてはならない。

中野 晴久さん

常滑市民俗資料館・陶芸資料館所長
1955(昭和30)年、常滑市生まれ。1981年に常滑市民俗資料館の開設と同時に学芸担当として採用される。以後、常滑の窯業史研究を続け、2011年より現職。専門は中世陶磁考古学。





学芸員ファイル

FILE No.004

著名人たちがこめた想い 日本魂復興記念書画帖

当館では著名人から揮毫された書画を400点近く所蔵しており、その多くは「日本魂復興記念書画帖」に収録されている。これらの書は、創業者後藤武夫が設立した思想結社である日本魂社が、関東大震災から復興したことを記念して寄せられた。

日本魂社とは

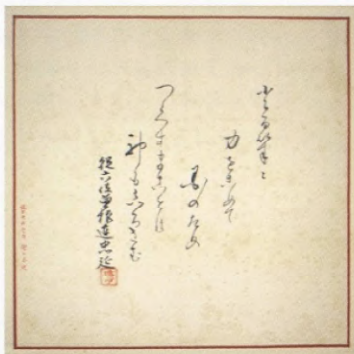
創業者後藤武夫は、帝国興信所とは別に、日本の伝統的な文化や思想を広めるために、1916(大正15)年「日本魂社」を設立した。日本魂社は雑誌「日本魂」の発行を中心に、さまざまな啓蒙活動を行う思想結社で、帝国興信所とは別組織という位置づけであったが、事務所は本社屋の中にあり、また帝国興信所の社員は日本魂社の社員でもあるとされたので、実態は一体化していたとみてよい。

『日本魂』は日本魂社が設立した16年に創刊された月刊誌で、廃刊になる34(昭和9)年まで、約18年間で延べ219号まで発刊された。総理大臣をはじめ政治家、官僚、文化人などさまざまな分野の著名人たち約5,000人が寄稿した。しかし『日本魂』は23年の関東大震災でやむなく休刊となった。同年12月に復刊するが、印刷

環境が充分整わない中、発行が社内向けに限定された。翌年4月には対外的に復刊し、誌名を「努力」と改題した。復刊の挨拶として武夫は「然るに昨年9月1日の大震災によって、日本魂社は、その母体たる帝国興信所と俱にその全部を挙げて滅失致しました。同時に雑誌の発行も中絶するのやむなきに至りましたことは、私の衷心より苦痛とする所であります。(中略)復興に努力しました結果、今やその母体たる帝国興信所は確実に復興の緒に就くに至りました。活版印刷等の設備も完了しました今日、当然来るべきものは、日本魂社及び之に付随する雑誌「努力」の復興であります」(『所報』1924年2月25日)と日本魂社が復興を果たしたことを述べている。

書画揮毫者の顔ぶれ

日本魂社が震災から復興したことを記念して、各界の著名人たちによって揮毫された書が集められた。『努力』の発行についての記事が掲載された社内報には、「朝野名士の記念揮毫を乞はれて居りますが、目下続々集まって居ります」(『所報』1924年2月25日)と記録があり、この



◁【写真③】樋口忠延

奈良県生駒郡にある龍田神社の宮司。



◁【写真①】井上角五郎

政治家・実業家。1882年朝鮮政府顧問。渡米後後藤象二郎らの大同団結運動に参加。90年から貴族院議員14回当選。北海道炭鉱鉄道、日本製鋼所、京釜鉄道、南満州鉄道の経営に携わる。



◁【写真②】三島通陽

小説家・政治家。祖父は官僚の三島通庸。父は8代日銀総裁三島弥太郎。ボーイスカウトの活動に尽力し、ボーイスカウト日本連盟初代理事長を務める。



【衆議院議員 井上角五郎】写真①
 震災もまた
 天恵なりとの心を戒しむる
 神の心を覚ゆれば
 災いやかて恵みなるらん

頃から書が集まってきたことがわかる。集められた書は318点にのぼり、1926（大正15）年、帝国興信所の新社屋落成の際、披露された。揮毫者一覽が翌年2月の社内報に掲載されている。それによると、顔ぶれは時の内閣総理大臣若槻禮次郎をはじめとして、清浦奎吾、犬養毅、浜口雄幸、高橋是清といった政治家、渋沢栄一、村山龍平ら実業家、田山花袋、野口雨情ら文人、曾我廻家五郎や中村歌右衛門ら俳優、その他軍人、県知事、学者、教育者、宮司、書家、歌人などジャンルは多岐にわたっていた。

著名人が寄せた言葉

これらの書は11冊の書画帖に収録されている。その多くは震災復興を祝う言葉や教訓などである。次の3点からは、教訓や震災のとらえ方が伝わってくる（肩書きは当時のもの）。

【貴族院議員 三島通陽】写真②
 そなへよつねに
 執る筆に力をこめて国のため
 尽すまことは神も知らさむ

①と③は、震災を悲観的に受け止めるのではなく、前向きにとらえている。関東大震災の経験を踏まえたからこそ、耐震性に優れた建築物が作られた。復興に尽すということは、同程度の災害に見舞われても同じ被害に遭わないように、後世に安全な世の中を残す、後世にとつての恵みとなるのである。②は教訓として当たり前のことであるが、「地震に備えて」と思いつくも実際地震が起こると痛感させられる。東日本大震災でも痛感した人は多いであろう。いつの時代も同じことが言える。

◇ ◇

これまで書画帖は「著名人たちが遺した作品」としてとらえていたが、東日本大震災を経験して、これらの書から学べることがあるのだと痛感した。一文字、一言にこめられた想いは、90年近く経った今にも通じ、貴重な財産となっている。



帝国データバンクの創業者、
後藤武夫が残した魂をこめた言葉の数々。
そこには信用調査業という事業への
挑戦と苦労の様子が垣間見える。

一話魂



九月一日の震災記念日は、我等に取りて

特に忘るることの出来ない思ひ出多い日である。

若し全国二千の所員諸君が當時の惨苦に想到し、

一齐に蹶起して、此不景氣に善処し、

且つ猛闘せられたならば、

一時的不況などは一氣に突破し得べきものだ と確信する。

『脱俗』288号、帝国興信所（1931年8月20日）

昭和恐慌の真っ只中である
1931（昭和6）年8月発行の社
内報『脱俗』巻頭言に、「震災直後
の如き大決心を以て不況の挽回に
努めよ」というタイトルで書かれた
一節である。

不況の煽りを少なからず受けて
いた帝国興信所はこの年、基幹事
業である信用調査の件数が前年割
れとなった。31年に入ってから『脱
俗』巻頭言では「近年財界不況の
影響を受けて、我が帝国興信所も
亦、本支所共に若干の影響を被り、
ややもすれば収支不償の状態に陥

らんとする傾向あるは誠に遺憾至
極である。」（4月）「本上半期の
成績は、本支所を通じて著しく不
良であった。即ち之が為め賞與を
減額し、定期昇給を見合する等、
遺憾の点が尠なくなつた。」（7月）
と不況による営業不振の状況が触
れられている。武夫はこの不況を乗
り切るために、社員を奮起させよ
うとメッセージを発信したのだ。

1923（大正12）年の関東大震
災では、帝国興信所でも30名を超
える死傷者を出し、本社は倒壊焼
失という悲惨な状況であった。しか

し調査件数を順調に伸ばし、3年
後には新社屋を建設するなどして
復興を遂げていった。震災後毎年
9月1日は犠牲者の追悼行事を
行っていたが、震災記念日の迫る
8月の社内報でこの状況を打開す
るために、震災後の苦労を例に挙
げたのである。武夫は巻頭言を
「我が敬愛なる所員諸君は、（中略）
猛々として震災直後の復興に任ず
るが如き大決心を以て不況の挽
回に努められんことを熱望してや
まない次第である。」と締め、社員
を鼓舞した。

国際シンポジウムで 出張展示

5月11日、国際文化会館（東京六本木）で開催された国際シンポジウム「ビジネススーパークイブズの価値―企業史料活用―の新たな潮流―」の会場ロビーで「老舗は世紀を超える」の出張展示を行った。このシンポジウムは、国際アカイブズ評議会企業労働アカイブズ部会（ICA/SBL）、公益財団法人渋沢栄一記念財団、企業史料協議会の共催で行われたもので、当日は8カ国の企業・公的機関の専門家からの基調報告およびパネルディスカッションが展開された。企業史料協議会の会員である当館は「テーマ展示」コーナーで開催中の同展を出張展示の形で公開、海外からの参加者にも老舗大國日本の現状を知っていただくまたとない機会となった。



ホームページをリニューアルしました

帝国データバンク史料館は、6月よりホームページをリニューアルしました。デザインを一新したほか、各コンテンツの更新情報がトップページで表示されます。また「WEBマガジン」ではこれまでの「学芸員日記」の拡大版である「学芸員雑記帳」のほか、本誌や関連書籍など随時更新していきます。

URLはこれまでと変わらず ▶ <http://www.tdb-muse.jp/>



分館での経営史料公開再開について

帝国データバンク史料館分館での経営史料は、地震の影響で一般公開を見合わせていましたが、6月1日より再開しました。

お問合せ

帝国データバンク史料館 ☎03-5919-9600
財団法人日本経営史研究所 ☎03-3262-1090



ご利用案内

[入館料] 無 料 [開館時間] 10:00~16:30(入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分/中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分/
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分/丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

 帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。